

サポート

No.176

令和3年3月23日発行

秋田県教育庁特別支援教育課 指導班

祝 卒業

令和3年3月、県内の各特別支援学校において、感染症対策を講じた上で、心のこもった卒業式が行われました。今回は、その中から県立視覚支援学校、県立聴覚支援学校、県立秋田きらり支援学校の卒業式の様子をお伝えします。

県立視覚支援学校

令和3年3月12日（金）、県立視覚支援学校の卒業式並びに修了式が行われました。小学部1名、中学部3名、高等部普通科1名、専攻科保健医療科1名、専攻科理療科1名、専攻科生活情報科4名、計11名の門出を保護者の皆様と共に祝しました。

式辞では、鈴木和人校長が、詩人相田みつを氏の『しあわせは、いつも自分のところがきめる』という言葉を送り、「たとえ他の人にはどんなに小さなことだと言われても、自分自身が“私はしあわせだ”と感じる人には新たな力が沸き、夢や希望をもって前に進むことができる。」と伝えました。さらに、「皆さんが、自分らしい希望の花を絶やすことなく心に咲かせ、自分の可能性を伸ばし、それぞれの未来を切り拓いてゆかれることを、心から願います。」と結びました。

卒業生と在校生による「別れの言葉」には、一人一人のメッセージや歌に、友達や仲間、家族、教職員への感謝の思いや未来への誓いが綴られていました。卒業生・修了生退場の際には、気持ちのこもった拍手が会場いっぱい響きわたりました。

<県立視覚支援学校 教諭 二田 富義>



【卒業証書授与】



【卒業生・修了生退場】

県立聴覚支援学校

令和3年3月10日（水）、県立聴覚支援学校では、小学部2名、中学部1名、高等部4名の卒業式が行われました。担任からの呼名に力強く返事をし、堂々と振る舞う卒業生一人一人へ大沢和浩校長から卒業証書が授与されました。自信に満ちた7名に、確かな成長の跡が感じられました。

校長は式辞で、たくましく生き抜く大切さを伝えた本を紹介し、「感謝の気持ちを忘れず、自分の可能性を信じて、夢の実現に向かい、生涯にわたって学び続ける姿勢を貫いてください。未来へ、『自主独立』の精神と希望をもって羽ばたいてほしい。」と激励しました。

「お別れのことば」では、在校生から卒業生へ感謝と伝統を引き継ぐことを伝え、卒業生からは、学校生活の思い出や支えてくださった方々への感謝、自分が進む道への決意が伝えられました。一人一人の心のこもった言葉に、会場は大きな感動に包まれました。そして、式を終え、ピアノ演奏による思い出の曲「パプリカ」が流れるなか、これまでの学校生活をかみしめながら、未来への希望を抱きまっすぐに前を見据え、卒業生は巣立っていきました。

<県立聴覚支援学校 教頭 松井 智子>



【校長式辞】



【お別れのことば】

県立秋田きらり支援学校

秋田きらり支援学校の卒業式は、令和3年3月11日（木）に大体育館で挙行了しました。小学部6名、中学部5名、高等部7名、計18名の児童生徒が新たな一歩を踏み出しました。

今年度の卒業式は、新型コロナウイルス感染症対策として、式への参加者は卒業生、小学部5年生、中学部2年生、高等部2年生の在校生、卒業生の保護者も一家族2名までとし、ソーシャルディスタンスに配慮した座席配置としました。また、卒業証書授与の様子が保護者から見えるように、大型スクリーンに映し出しました。さらに、歌「旅立ちの日に」の際には、卒業生のこれまでの学習の様子や学校生活の思い出を、スライドショーで振り返りました。

新目基校長は、式辞で「卒業生一人一人が、自分色の輝きを失わず、さらに『きらり』と光り輝くことを祈念します。」と述べ、一人一人に卒業証書を手渡しました。

卒業生を代表して、高等部3年生の佐藤優翔さんは、お世話になった方への感謝を伝え、卒業後への希望と決意を述べました。卒業生全員の晴れやかな笑顔が、輝いていました。

< 県立秋田きらり支援学校 教頭 兜森 宏征 >



【卒業証書授与】



【卒業生代表答辞】

北海道・北東北三県教員人事交流を終えるに当たって

令和元年度からの2年間、青森県立盲学校で勤務されている奥山教諭から、任期を終えるに当たっての所感等を寄稿いただきました。

「日々是好日」

青森県立盲学校 教諭 奥山 留美子



令和元年度から青森県立盲学校に勤務し、2年が過ぎようとしています。本校は青森市東部に位置し、温泉地として有名な浅虫まで車で約20分。日本屈指の積雪量を誇る八甲田山系も車で約1時間の距離にあります。学校周辺は公共交通機関も発達しており、青い森鉄道の駅や路線バスの停留所がともに徒歩約10分圏内にあります。そのような環境を利用して、生徒と歩行練習をしていると、地域の方々に温かい声をかけていただくことがあります。また、児童生徒が歩きやすいように、学校周辺の雪の除雪も丁寧に行っていており、地域に見守られていることを実感する日々です。

今年度は、コロナ禍の影響を多分に受け、人と接する機会が減り、例年通りにはいかない日々の連続でした。所属する中・高等部では、こういうときだからこそ地域とのつながりを意識しようという思いを込め、総合的な学習（探究）の時間の計画をしました。県の事業を活用し、地域の企業の協力を得ながらキーホルダーとハンカチを作成し、学校周辺の町内会や企業等への配布活動などを行ったことで、地域との絆、生徒同士の絆も深まりました。

秋田との相違に触れるたびに刺激を受け、これまでを振り返るよい機会となりました。ここで経験して学んだことを今後の教員生活に役立て、秋田の教育に還元できるよう、努めてまいります。



制作グッズのプレゼンテーション



地域への配布活動

事業紹介「学校と放課後等デイサービス連携促進事業」 ～学校と放課後等デイサービス事業所の連携促進に向けた研修会～

特別支援教育課では、教育と福祉の連携により、障害のある子どもやその保護者への切れ目ない支援体制を構築することを目指して、令和2年度から「学校と放課後等デイサービス事業所の連携促進事業」に取り組んでいます。事業内容の中から、大館市、潟上市、大仙市で開催した「学校と放課後等デイサービス事業所の連携促進に向けた研修会」を紹介します。

- ・目的：障害のある子どもの生活や学習を総合的に支援するために、連携に係る好事例の共有や課題解決の方策等の検討を通して、学校と放課後等デイサービス事業所の連携促進を図る。
- ・参加者：（関係市）小・中学校、教育委員会、放課後等デイサービス事業所、障害福祉担当課 等

※以下、放課後等デイサービスを「放デイ」と記載

1 趣旨説明及び放デイ対象の連携に係る調査結果報告

「家庭・教育・福祉の連携『トライアングルプロジェクト』報告」など国の動向を基に、連携促進の必要性等について説明しました。また、今年度実施した調査から「連携をしているが十分ではない」と感じている現状等について報告し、パネルディスカッションの協議へ提起しました。

2 パネルディスカッション「切れ目ない支援に向けた連携体制の構築に向けて」

パネラーからの話題提供を基に、連携上の現状と課題を共有し、連携の在り方や課題解決の方策等について参加者全員で考えました。

○コーディネーター（3地区）

秋田大学教育文化学部 鈴木 徹 准教授

○パネラー（各地区：大館市・秋田市・大仙市）

市教育委員会、放デイ、市障害福祉担当課

コーディネーターから

- ・家庭・学校・放デイは、それぞれの役割は異なるが、「育（む）」は共通しており、支援等をしていく上で重要な視点である。
- ・連携が目的となってしまう、「なぜ連携するのか」が漠然としているため、「連携はしている」が「十分ではない」と感じるのではないかな。
- ・「なぜ連携するのか」について、連携上の現状と課題から明確にし、今後の連携の在り方を考えていきたい。

パネラー・フロアから

- ・子どもを丸ごと捉える視点が大事である。（パネラー：教育委員会）
- ・お互いの取組を知ることが必要である。（パネラー：放デイ）
- ・子どもたちの成長が職員としての支援の醍醐味である。（フロア：放デイ）
- ・まずは、放デイについて教員の理解が必要である。（フロア：教育委員会・学校）

コーディネーターのまとめ

- ・子どもを「それぞれの場での捉え」と、生活全般から見た「トータルでの捉え」の二つの視点から見る必要がある。この視点を踏まえ、次の取組が考えられる。

①それぞれの場を知る取組

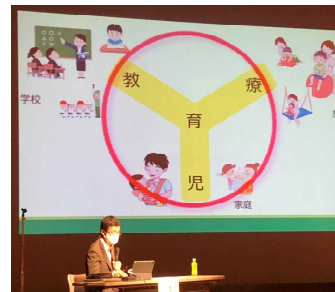
関係機関同士が情報共有するだけでなく、どういう背景、環境の下に支援しているのかをお互いに知ること。

②場と場をつなぐ取組

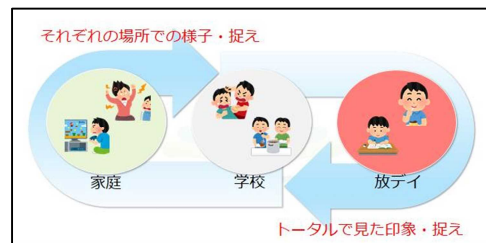
通信による情報発信、連絡帳のやりとり等の方法で、次の場につないでいくこと。



【パネラーの皆さん】



【共通する「育む」の視点】



【まとめのスライドより】

参加者のアンケートでは、「目的や役割は違っても『子どもを支えていく・よい方向へ促す』ためにできることを互いに提案していければよい」「個別の支援計画を活用していきたい」等の感想が多く寄せられました。引き続き、教育と福祉の連携を深め、切れ目ない支援を推進していきます。

県立比内支援学校 新校舎の紹介

県立比内支援学校の新校舎棟は、令和元年12月に完成し、令和2年1月から使用しています。校舎改築基本構想に示した職業自立を目指し、本物の作業学習が実践できるよう特別教室が充実しました。

「食品加工室」では、菓子製造の営業許可を取得し、販売できるようになりました。高等部作業学習班の農園芸・食品加工班では、本校の広大な農地で採れた野菜を使用し、食品加工室で菓子製造等を行っています。外部講師の指導の下、枝豆フィナンシェやシフォンケーキ等のオリジナルスイーツを開発したほか、乾燥野菜も作り始めました。「縫製室」にはガスコンロがついており、草木染めに力を入れている縫製班は、1か所で染織ができるようになりました。また、「陶芸室」には新たに電気釜が設置され、陶芸班がタイマー予約を使用し、効率的に器を作っています。その他、開放的な「地域交流室」があり、地域の方々と交流する場として活用しており、今後も「地域との連携」のために、効果的に活用していく予定です。

＜県立比内支援学校 教頭 松下 健＞



【食品加工室：菓子製造の様子】



【縫製室：茜染めの様子】



【陶芸室：電気釜素焼き準備の様子】



【地域交流室：発表会の様子】

受賞おめでとうございます

「障害者の生涯学習活動」に係る文部科学大臣表彰

秋田市のNPO法人「アートリンクうちのあかり」が、令和2年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰のうち、奨励者表彰（活動に顕著な成果があり、今後の発展や他への普及が大いに期待されるもの）を受賞されました。芸術文化系団体の受賞は、本県では初めてのことです。

令和3年3月18日に教育庁ホールで受賞報告会が開かれ、代表の安藤郁子さん、スタッフの戸嶋祐子さん、利用者の戸嶋諄さんが報告に来てくださいました。



文部科学大臣優秀教職員表彰



栗田支援学校の北島珠水教諭が、令和2年度文部科学大臣優秀教職員として表彰されました。

食品衛生優良施設としての表彰



栗田支援学校高等部環境・福祉科による「ランチくりた」が、秋田市保健所長から食品衛生優良施設として表彰されました。